
たんぽぽ

石山ウルマ。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たんぽぽ

【Nコード】

N2493P

【作者名】

石山ウルマ。

【あらすじ】

陽子は花屋でアルバイトをするなんて、思っていなかった。

前編

たんぽぽ

5年間勤めた銀行を辞めてから、一月ほどはのんびりとした時間を過ごした。

読みたかった本をまとめて読んだし、友達とお酒を飲みながら深夜まで話し込んだし、

お菓子作りにも挑戦してみた。

親には銀行を辞めた事は言えなかった。

言えば父は怒って「実家に戻って、さっさと嫁に行け」と言うだろう。

さらに「どれだけ頭を下げて、採用してもらったと思っているんだ」と言うだろう。

母は「辞めちゃってさ、お前は本当に馬鹿だね」それしか言わないだろう。ただし、いつまでも母はそれを繰り返す。

父も母も、私の平凡な寿退社を願う人たちだ。

そんな両親の娘への愛情も義理も、ただただ重たいだけ。

一月ほどはのんびり過ごせたけれど、それから先の日々は持て余す時間が苦しくなった。

時計の秒針を見ると息苦しさを感じた。

死にたいとは思いつめなかったけれど、生きていたくもなかった。

テレビをつけるとワイドショーで『自殺は愚か者の決断だ』と言っていた。

軽い言葉に吐き気がした。

生きていたくもないけれど、お腹がすけば何かを食べた。

私の身体は、脳とは違う行動を取らせている。不思議だなと思う。中学時代の担任は「簡単に不思議という言葉を使うな。探究心のなさを不思議という言葉で片付けてはいけない」

そう教えたけれど、こんな自分のどこを探究すれば、答えが出るのだろう。

生きていたくもないのに、お腹がすけば何かを食べる。

不思議だなと思う。

アルバイトをする気なんてなかった。

当分の間の生活費には困らないし、労働意欲なんてさらさら湧かなかった。

近所の花屋の花を見つめていた。

小さな店先に私の知らない花が沢山あった。

私にはまだまだ知らないことが多いと思った。

引き戸のガラスに『アルバイト募集中』の張り紙。

時給金額を読むと、とっても安い。

ボーナスだって無いし、有給休暇も無くてこの賃金かと思うと、世の中の厳しさを改めて知った。

その張り紙を見つめていたら、店内から女性が現れて

「アルバイト、お願いできませんか」

突然に声を掛けられて、一瞬、あっけに取られてしまった。

その女性はとても綺麗な人でした。

特に高価なものは身に着けてはいないけれど、どこかセンスが良い感じがした。

きつと細やかなところに、気配りが出来る人なんだろう。うらやましく思う。

そして花屋に良く似合う、やさしい雰囲気漂っていた。

「時給、安くて申し訳ないんですけど、アルバイトお願いできませんか」

私はいったい何を見込まれたのか、解らなかった。

『お願いできませんか』という言葉に私は戸惑った。

「あら、ごめんなさいね。勘違いでしたか、アルバイトを探しているのかと思ってしまつて。ごめんなさい」

戸惑っている私に、その女性はそう言つて頭を下げてくれた。

「いいえ、別にそう言うわけではないのです」

探究できない不思議なんて、結構身近に沢山あるのだと思う。

私はその花屋でアルバイトを始めてしまった。

美智子さん、32歳。この小さな花屋の女店長。

私よりも9歳上。たかが9歳、されど9歳。

美智子さんは、時には同級生の様であつて、時には手の届かない大人だった。

花屋で働き出して、すぐに気づいた。

多種多様の花の香りが渦巻いている。その臭いは、あるいは混沌と沈殿している。

それは香りという言葉で言い表すよりも、臭いと言いたい位の不快感があつた。

それぞれの花が自己主張をして、臭い。

花屋なんて、可憐さを楽しみ通り過ぎるもので、店内に長く留まらべき所ではないと思つた。

「ねえ、陽子ちゃんはどうな花が好き」

「たんぽぽ」

美智子さんは笑いながら

「残念ね、このお店には置いてないもの」

これが同級生の美智子さん。

「別れた男も、たんぽぽが大好きだった。死んじゃったけれどね」

「事故ですか」

「ううん、自殺」

これが大人の美智子さんの横顔。

後編

ある日のこと、若い男性が花を買いに来た。

「好きな人に花を送りたいのですが、選んで戴けませんか」

それは20代後半と思える、笑顔のさわやかな人だった。

「その方は女性ですか」と尋ねたら

「ええ、勿論です。とても可愛らしい感じの人です」

はきはきとした声で伸びやかに言った。

予算を尋ねたら「いくらでも構いません」

悩みながらも私の好みで、花束をこしらえて差し上げた。 3200
円。

お釣りを渡したら

「この花をあなたに贈ります」と自分でこしらえたばかりの、花束を渡された。

嫌な感じがした、うれしくなかった。この人のさわやかさも消えた。その人に笑顔を贈る気持ちは、少しも湧かなかった。

この男は初めから『私の驚きを計算して』花束を買ったのだ。

美智子さんにこの話をしたら

「それは勿体無いことをしたわね。それならもつと高価な花を選んでおけば良かったわね。でも気にしないで、陽子ちゃんも可愛いから、可愛い子は徳ね。同じようなお客はこれ方も続くわよ。男の発想なんて大体同じよ。気にしない、気にしない。陽子ちゃんのお陰で、売り上げは伸びる」

美智子さんはどこまで本気なのだろう。お店の売り上げを気にしたのだろうか、私を慰めたのだろうか。私を茶化したのだろうか。解らなかった。

でも、可笑しくて二人で笑い合ってしまった。

「ねえ陽子ちゃんはどうして、たんぽぽが好きなの？」

「いつも身近に咲く花だから」

「でも、珍しさに欠けるじゃない」

「珍しさなんて要りません、たんぽぽが好きなんです」

「何だか陽子ちゃんて、不思議な子ね」

「私には美智子さんの方が不思議ですよ」

美智子さんは、私が不思議に思った理由を聞いて来なかった。

いつの間にか店内の、混沌とした臭いも気に成らなくなっていた。

それから数日後、美智子さんは

「お店に、たんぽぽの花、並べてみようか？」と相談してきた。

「冗談でしょう」

「少し本気よ」

「でも生花市場で、たんぽぽを仕入れられるんですか」

「あっそうか、ある意味、たんぽぽは珍しい花だわね」

「それに、たんぽぽを買う人なんて誰もいませんよ」

「そうよね、誰も買わないか、それでも私は良いんだけどね。ふ

ふふ。」

美智子さんは呑気に笑うようで、それでいて寂しそうだっ

「でも、どうして急に、たんぽぽなんですか」

「たんぽぽ、私も好きになった」

美智子さんは、別れてその後死んでしまった男の人が、今でも好きなんだろうと思った。

「昔から、たんぽぽ、好きだったんじゃないんですか」

「それはどうかなあ」

「私、勝手にそう思います」
「どうぞ、ご勝手に」

「ねえ美智子さん、いつその事このお店の名前を『たんぽぽ』に変えませんか」

思い切ってそう言ったあと、束の間の沈黙があつた。

美智子さんはその時、何を見ていたのかは解らない。

ぼんやりとした視線で中空を見つめているように見えた。

私は美智子さんの顔ばかりを見つめていた。

「陽子ちゃん、それ良いね。そうしようか」

すると美智子さんの頬に涙がこぼれた。

「はい、良いと思います」

私は、店内に並べられた沢山の花を見ながら、泣いた。
その涙は不思議でもなんでもなかった。

それからの私は生きようと思って、ご飯を食べた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2493p/>

たんぽぽ

2010年12月9日02時51分発行